

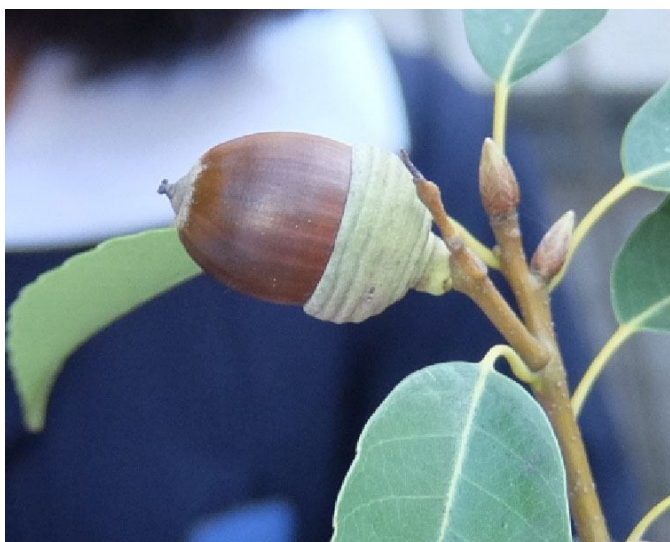
「樫の木の下で (5)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

シラカシの果実(ドングリ)は、帽子(殻斗)ごと枝から落下することが多い。殻斗は残して、ドングリ本体(種子)だけを落としたほうが能率が良いようにも思う。しかし、殻斗は「種子を育てて保持する」部品であるから、種子を落としたあとは樹にとっては邪魔者である。一気に落としてしまったほうが良いのだろう。種子と殻斗も非常に簡単に分離できるが、枝と殻斗の関係はどうなっているのだろうか？



上写真は、殻斗と枝先の接合部の拡大である。斜めに接合していて、はっきりとした境界線(トレンチ)が見られる。果実が完全に成熟すると、接合部の細胞が具合よく枯死し、果実の重さや振動で分離する仕組みがあるのだろう。



果実のある枝先をよく観察すると、すでに冬芽が用意されているのがわかる。子どもたちも「これは何ですか？」と不思議がっていた。花芽か葉芽かはわからないが、今年の実が落ちないうちに、すでに次の季節の準備をしているのである。



教室に持ち帰ったドングリを、さっそくみんなで観察することにした。ドングリのような観察対象の場合、3年生の子どもは、観察カードに実物大に描こうとする。大きく描けば特徴を細かく記録できるのだが、「目の前にあるものを、大きさを変えて描く」ということは、実は3年生にとっては案外難しいことなのかも知れない。

さて、子どもたちの観察カードに書かれた 文章の中に、驚くべきものがいくつか見られた。

【子どもの観察カードから】(*筆者注)

「大学校内(*構内)の日時計ひろ場で、しらかしのどんぐりをたくさんひろいました。私はどんぐりが木になっているのを見て、どんぐりって、木の実なんだと、はじめてしりました。」

「私は、2年生の時に、ライオン池(*校庭の壁泉)のところで、ドングリをたくさんひろいました。その時は、ドングリは、土の中にできると思ってました。でも、かしの木になってって、おちてくると知ってびっくりしました。」

びっくりしたのは、私自身である。3年生でもドングリが木の実であることを、今の今まで知らなかった子どもがいたということである。観察から気付かせることがいかに重要かを、再認識したように思う。